**知られざる世界　「過去編」　　・・・目　次**

1. **ＵＦＯ**（202２年1月掲載）
2. **三次元テレビ** （　　〃　　　1月掲載）

１・　人造人間　　　　　　　　　　　　　（　　〃　　　 1月掲載　）

２．　日蓮　　　　　　　　　　　　　　 　（ 　〃　　 2月掲載予定）

1. **アトランティス**

１．　三度目の招待

２．　アトランティスの教師

３．　見学旅行

４．　エジプトへ

５．　アトランティスの最後

1. **バビロニア**
2. **ベツレヘム**

**２，　　日　蓮**

**画面は薄暗く、ぼんやりとした輪郭以外何も見えなかった。**

**静かに見守っていると、波の音がかすかに聞こえてきた。**

**じっと目を懲らすと、松の木と馬、二〇人ほどの人影が微かに見えて来た。**

**何本かの松明の明かりが人の動きを可能にしていた。**

**黒々と見える刀の鞘や服装の輪郭からして彼らは武士に間違いない。**

**（・・ここは日本か？・・・）**

**空を見上げると、曇り空らしく星も月影も見当らなかった。**

**人の顔の見分けもつかぬ薄暗い夜である。**

**突然、叫びが聞こえた。**

**「お聖人さまあぁぁ！」**

**その声は、言いようのない苦しみと悲しみに満ちていた。**

**ただならぬ事が起こっていると感じた。**

**その声の主は、若い僧侶のようだった。**

**無念やるかたないという容姿で、首を振りながら泣いているのである。**

**「泣くでない！法華経のため法のため死ねるのだ！これ程の喜びがあろうか！」**

**その声は凜として諭すようであり、また確信に満ちていた。**

**若者から４～５メートル離れた所にいる馬上の僧を私は見た。**

**その目を見た時、私の息が止まった。**

**落ち着きと威厳に満ち、見据えられた者は心の中を総て見通されてしまう様な目だった。**

**（・・法のために死ねる、とか言っていたが、この人が日蓮聖人？・・これから**

**首を切られようとしているのか？・・死に際して、こんなにも超然としていられるとは、一体どういう人なのだろう？）**

**私は目を懲らしながら辺りをぐるりと見渡してみた。**

**屈強な武士たちが十人余り居り、次々と馬上から降り始めた。**

**そして砂場に刑場を作り始めた。**

**日蓮上人と思われる僧が馬上から降りると、弟子たちや信者らが近寄ってきて来た。**

**「お証人様！・・」とか「無念で御座います！」とか口々に叫び、その後は声に**

**ならなかった。**

**「とうとうその時がやって参りました。」**

**あの若い僧がそう言うと、泣きながらしおれるように正座した。**

**「法華経のために命を捧げるのだ・・何故笑ってくれぬ・・」**

**その声は、慰めるようにもたしなめる様にも聞こえた。**

**処刑場が出来上がるのをじっと見守っていた武士の指揮官らしき人が、**

**見事な鞘を持った武士にこう命じた。**

**「では直重、首尾よく事を成すように・・」**

**直垂の膨らみをたすき掛けのように帯でまくし上げたその武士は、**

**丁重に頷くと、上人の方を向いた。**

**その様子を見ると、上人は、促されるより先に、歩き始めた。**

**信者らの手を振り切るように、自ら海側の刑場の方に歩いて行った。**

**そして、こちらに背を向け砂の上にゆっくりと正座した。**

**瞑目しながら題目を唱え始めた。**

**「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経・・」**

**弟子らも一緒に唱和し、その響きは徐々に大きくなり、天地に響き渡り、**

**闇夜に吸い込まれて行った。**

**直重と呼ばれた武士が、とうとう美しい鞘から太刀を引き抜いた。**

**薄暗い夜の闇の中にあっても、その冷たい切れ味が伝わってきた。**

**（！？まぶしい・・）**

**丁度その時、満月のような月が現れた・・と思った。**

**不意の明かりに勤行の声が途絶えた。**

**いや、一人だけ続けている者の声が聞こえる。**

**あの日蓮聖人その人だった。**

**皆、空を見上げた。**

**私も皆に倣って上方に目を懲らして見た。**

**その物は、右手から空中を滑るようにやって来た。**

**高度は不明だが、大きさは丁度満月位で、明るさもその位だった。**

**それが真上にやって来たときには、辺りの情景が鮮明に映し出された。**

**首を切ろうと武士は、良心の呵責があったのか、手のひらを返すように**

**伏せってしまい、兵士たちの表情には、恐怖の色が有り有りと浮かんで**

**いた。**

**その場から逃げ出す者、正座したり伏せたまま動かない者等、何かの**

**仏罰を恐れておののく様子が映し出されていた。**

**これらの者に対して、弟子たちや信者らの様子は相反するものだった。**

**皆、表情がぱっと明るくなった。**

**仏の加護が来たと歓喜の表情を見せる者、何が起きたのか未だ事態が**

**飲み込めない者、大きく口を開け呆然としている者など、喜びながらも**

**こちらも様々な様子をみせていた。**

**皆が混沌としている中で、日蓮上人だけは、正座の姿勢を崩さず、超然と**

**題目をとなえていた。**

**（上人は死を覚悟していたのか？それとも助かる事を確信していたのか？）**

**私にはそういった事は分からない。**

**しかし、超然と使命に生きるその姿は、くっきりと私の目に焼き付いた。**

**（百パーセントＵＦＯじゃないか？・・・直径は１００メートル位か、何て**

**グッドタイミングで出てくるんだ！）**

**「ＵＦＯの内部をお見せしましょうか？」**

**あの宇宙人の声だった。**

**忘れていたが、私はＵＦＯの内部に居たのだ。**

**この三次元ＴＶは、如何しても現実と画面の違いを無くしてしまう。**

**「この船の中はまだ見ていなかった・・有り難う御座います。」**

**と私は答えた。**

**彼は和やかに笑いながら「あの日蓮様を救ったＵＦＯの内部の方ですよ。」**

**と答えた。**

**「え？・・やはりあれもＵＦＯだったんですね。」**

**「そう、二十世紀の貴方なら書籍か何かで同型の物をご覧になっているでしょう。**

**あの船は小型の母船で、二〇機の小型ＵＦＯを格納出来るのです。**

**あれは一〇〇メートル程の大きさですが、五〇〇メートル程の長さの葉巻型**

**宇宙艇やや直径が数キロもある小惑星程の大きさの母船もあるのです。」**

**うーん、ＳＦみたいな話ですが、それにしても日蓮上人の首が切られそうな**

**場面にナイスタイミングで現れましたね・・・」**

**「あなた方の先祖は私達の先祖でもあるのです。遠い昔、我々の先達が、**

**地球人の寿命は、最大百年程で終わるよう遺伝子を改変したのです。**

**その事はにわかに信じられないかもしれませんが、人類は、長い間、**

**知性体に見守られてきたという事だけは信じて下さい・・日蓮上人を**

**救ったＵＦＯに三次元ＴＶのチャンネルを合わせますので、ご覧下さい。」**

**時間を語群前に、場所は小松原の南東の方角、高度三〇〇〇メートル**

**上空とセットする・・と私に教えてくれた。**

**・・・やがて、広いコントロール室が映し出された。**

**二十代から三十代の操作担当者が十名ほど居り、知性とカリスマ性を**

**漂わせる指揮官らしき人も居た。**

**その指揮官の隣にあるモニター画面には、松の木陰を縫って歩く十数頭の**

**馬と馬上の人達がくっきりと映し出されていた。**

**このモニター機械には、何らかの方法で暗い地上を映し出す機能が付いて**

**いるらしい。**

**その指揮官と若者の一人がじっと三次元画面を視ていた。**

**その若者がこう言った。**

**「日蓮氏の精神の波動が指揮官の精神内部に入ってきた時、さすがに貴方も**

**驚かれましたね・・」**

**指揮官は言った。**

**「七年前にも同じような強烈な祈りの波動が私に伝わってきた。君はまだ、**

**フリートス星の初等学校９年生だった。彼からのあの強烈なビジョンを**

**受け取った時、月面裏側の基地に帰る途中だった・・・上人は、宇宙の実相を**

**捉えている様だ。私は急遽、鎌倉の上空に二ヶ月も船を滞空させたのだ・・**

**そして、日本の実情をつぶさに調査した。」**

**「あの時から日蓮上人を見守っている訳ですね・・」**

**「鎌倉時代の日本の状況から言って、国を救えるのは彼を置いて他には**

**いない！彼を死なせるわけにはいかないのだ・・ところで、あの船が宇宙船とはさすがに誰も気付かない様だ・・・あの上人ですら、彗星とか妖星とか呼んでいるようだ・・・この船も宇宙船であるとは気付くまい、無理も無い・・あと７００年も経たねばＵＦＯはメジャーにならないのだから。」**

**大使と呼ばれるこの人は、少し微笑んだ。**

**「ところで大使、どの様な救援策をお考えですか？」**

**「われわれは、月天になぞらえて呼ばれている様だ・・・確かに私は、月面基地の大使である。だから、私とこの船は確かに月の神二違いない。」**

**皆は大使の方を向いて、それぞれ顔を見合わせて、和やかに微笑んだ。**

**「この私、月天様が現れるだけで肝を冷やすに違いない。あと五分で武士は刀を抜く・・丁度そのときに、その真上を通過するように飛行せねばならない。**

**それでも尚強行しようとするなら、光線兵器を使用しなければならないだろう。」**

**ここで、私の背後から声が聞こえた。**

**「日蓮上人というお方は、常人離れした知恵と霊能力により宇宙の実相を知っているようです。別面基地の指導者を月天、太陽の裏側にある惑星の指導者を日天、火星の基地の長老を帝釈天、この太陽系全体の庇護者を梵天様と呼んでいます。**

**おそらく、宇宙連合組織の事も悟っているのではないでしょうか・・・」**

**ここで私は、質問したい感情を抑えきれなくなった。**

**「さっき、波動が大使の精神に入ったとか何とかおっしゃっていましたが、あれは何ですか？」**

**金髪の彼はこう答えた。**

**「我らの大使は、高い精神性と高い科学力を持っています。テレパシーや予知等の超能力を自在に駆使すると同時に、宇宙船の飛行原理や高度な宇宙科学にも精通しているのです。一方日蓮上人もレベルの高い精神性を保持しているのでしょう・・だから、波動が通じ合うのです。類は友を呼ぶと言う諺が日本にあるようですが、我々の国・・あ、それはプレアデス星団の彼方に存在する**

**惑星の事ですが、そこにも似たような諺があります。テレパシーの波動は、**

**実は何段階かありますが、一般に光速を遙かに超える早さで到達します。**

**先日大使は、モニター画面を視ながら、上人と何か会話をしていました・・・**

**あの宇宙艇を直ぐ呼び寄せるのですから、霊的位では上人の方が上かも**

**知れませんね・・・科学知識はともかく精神性においては・・・・」**

**興味深い話を聞いているうちに、巨大なＵＦＯはさっきの場面の真上にやって来た。**

**モニターＴＶは、さっきの場面を上方から映し出していた。**

**私の案内者である彼はこう言った。**

**「さっきご覧になった場面ですので、タイムＴＶは別の場面に致しましょう。**

**上人はこの事件の後、本間重連宅に身を寄せますが、明日の夜もＵＦＯを**

**滞空させねばなりません。上人が月天に験を求めるからです。**

**あ、そうそう、大使とお話をしていた若者は私の父です。似ているでしょう。」**

**（？・・・あの場面は７００年も前の話の筈・・・どういう事なんだろう？・・）**

**「進化に伴って寿命も伸びるのです。地球人の年齢に１０を掛けて頂ければ、**

**大体我々の年齢が出てきます。」**

**「・・・あの場面の若者は２０歳で、貴方４０歳位とすると、若者は２００歳で貴方は４００歳となる？」**

**「大体その通りです。私は末っ子で、父が５００歳の時の子供です。私は三人兄弟ですが、フリートス星では、二人以上の子供をもうける事は希です。**

**私は地球の西暦で言うと、１５７０年に生まれた事になります。」**

**「・・・どうもよく分からないですが・・・・とにかく良い事ですね。」**

**彼は笑いながら、こう付け足した。**

**「その代わり、教育期間も長いですよ。普通、最短でも７０年は勉学期間で、**

**結婚も歳以降に行うよう勧告されています。勉学期間の長い人々は、**

**２５０年位勉学と学習に回す方もいます。」**

**彼はどう見ても４０歳位の金髪の白人にしか見えないので、４００歳の**

**実感は湧いてこないのである。**

**彼は子供を慈しむ親のような目をしながら、こう言った。**

**「もう時間が来ました。貴方の精神も混乱しているでしょう・・一度に多く**

**の経験をされたので・・・」**

**「あ、ハイ・・」**

**驚くような体験ばかりだった。**

**生まれてこのかた初めての経験・・・心躍る気持ちと混乱と不安と、そして、**

**・・余りに進みすぎた科学と精神性に嘆息し、今の地球がこのように進化する日は余りに先であろうという絶望感も生じた。**

**これが最後であろうか？という惜別感も生じてきた。**

**「素晴らしくも信じがたい体験でした・・あの、これが最後なのでしょうか？」**

**「先ほど精神の同調という話が出ましたね。貴方は気づいていませんが、我々は、理解者に成れる者、その可能性の或る者を選んでお見せしているのです。」**

**彼は微笑んで、最後にこう言った。**

**「ご安心下さい。貴方の心と生活が一段落したら、又色々なものをお見せ　しましょう。さらなる過去の事から、今より未来に至る事まで総て・・・」**

**ここで、吸引ビームの下に立つように指示された。**

**私の体は一度空中に保持され、足元の床が二メートル四方ほど開いた。**

**吸引力が少し弱められたと感じた途端、私の体はスルスルと下降を始めた。**

**・・・円盤の高度は、十メートル余りのようだった。下降の途中、首が左右に振れるだけ振れる範囲を見回して見たが、目撃者は、私の飼い犬だけのようだ。**

**余りに特異な体験の為か、吠えることを忘れてしまった様だ。**

**怯えるべきか驚くべきか度肝を抜かれたような表情をしているのである。**

**この時、私の心の中には、日蓮上人を上空から眺めた時の取り巻きの人々の様々な表情が、有り有りと浮かんでいた。**

**令和２年１２月２５日現在、世界はコロナウイルスの件で席巻されている。**

**こういう事態は確かに試練である。**

**この事が収束し元の状況に戻ったなら、世界は元のように推移するのだろうか？。**

**私の考えであるが、これはこれから起こる異変の一つに過ぎないと考えている。**

**さらなる異変に耐えながら生きていかねばならないとすると、我々人類は思う**

**以上に大変な世界に生きているという事になる。こういう混沌とした時代において、**

**この小説にこれからの厳しい時代を生きる上で何らかのプラスになるものを**

**見出して頂けるならば幸いである。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　筆筆者　宍戸　庸一**